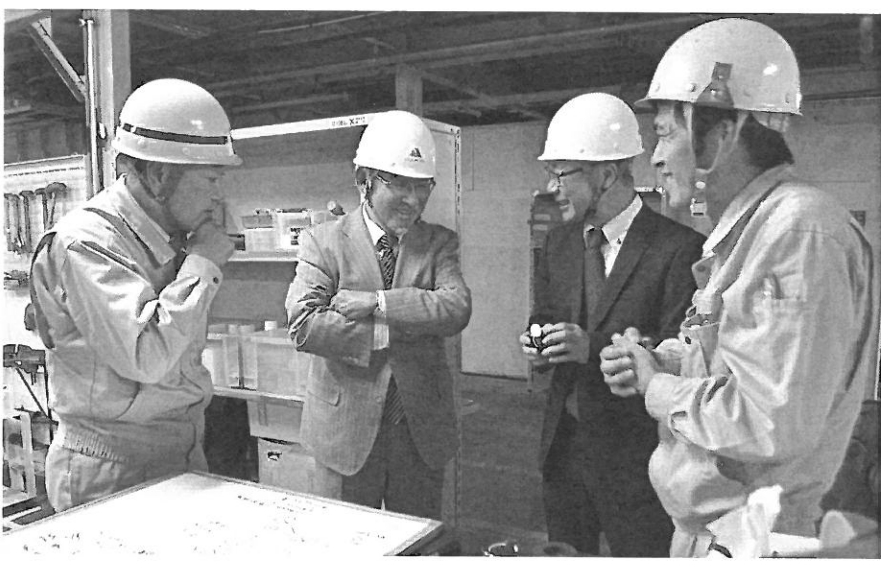


鉄から環境、そして宇宙へ 挑戦するフジコー 夢と計画性で、人生意気に感ずべし!



フジコー 社長 山本 厚生氏



技術開発センターでさまざまな研究開発を行っている(左から2人目が山本社長、右から2人目が長野)

創業から60年を越え、経営は山あり谷ありでした。創業で父の山本秀祐が、終戦直後の八幡製鉄所(現新日鉄住金)で鋳造修理を始めたのが始まりです。この修理鋳造を使うことで鋳造コストを下げることができると評判を呼び、多くの製鉄所に広がりました。これで企業としての礎ができました。ところが高度成長期に入ると「連続鋳造法」が本格的に導入され、これがエネルギーコストを下げることに鋳造の修理需要が激減したのです。

苦渋の決断を 乗り越えて飛躍

それでも再加熱圧延する『造塊法』がゼロになるには考えなかつたし、連続鋳造法を説明したドイツの会社も製鉄所の幹部ですら、割は残ると言っていました。しかしそれで安心したのが失敗でした。早急に新規事業を模索するべきでしたが手元の仕事が忙しくて後回しに。結局、人手も資金も足りずに15年連続赤字。1981年に父からバトンを引き継いだ直後に1500人の従業員を800人までに削減するリストラを行って苦境に陥りました。

それは苦渋の決断ですね。「ただ、私も経験が浅く、そこで誤った判断をしないでほしい」と。最初の人員削減では給与水準が高い経験豊富な社員に手を付けてしまったのです。これが反発を受けました。技能伝承という点から問題だと気づきました。その後、人員削減は会社にとって大切な人は残すようにしたのですが、この時にもう人員削減はしない、ピーク時に新しい事業を始める。この二つを心に決めました。2001年に技術開発センター(北九州市戸畑区)を開発したのもそういう思いがあったからですね。「そうです。リストラ後、新規事業開発に取り組む鋳鉄の肉密接接に端を発する、性質の違う金属同士を接合するCPCプロセスが屋台骨に育ちました。ローラー製造からローラーまで広がるのに数十年前かかっていた。もともとは製鉄所が独自に圧延ロールを製造していたのですが当社が開発した力を入れて参入しました。当初は「中小企業が作ったローラーなど使えないから」と散々悪口を言われて苦労しましたが、外部から技術者を呼ぶなど技術レベルを高め、ようやく大企業と肩を並べるようになりました。その後もうろろのな研究開発を続け、技術開発センターを開発しました。そこで新しい柱の光触媒事業が育ちました。」

光触媒技術を 宇宙で研究する

宇宙航空研究開発機構(JAXA)と共に、光触媒技術を使って有人宇宙施設内の消臭と殺菌の共同研究も行っています。宇宙ステーション補給機「こうごう」に搭載して、マウスの尿や排泄物を分解する装置を開発しました。16年初頭にNASAのマウスを送り銅育実験を始めます。「特定分野に長じた人物を外部から招いて手を鍛えます。介護施設に当社の古くからの従業員はいませんが、専門家を新たに募ることで今の介護事業が成り立っています。一朝一夕にはいきませんが、社内人間は外に対して自社を誇れるような、また外部からは「あんなにいい会社で仕事したい」と思ってもらえるような、そんな魅力的な会社づくりが重要だと考えています。」

「最後は2052年の創業100周年に向けて、創業100周年にはグローバル企業と呼ばれるよう皆で頑張っています。」

「ローラー、ローラーは『あんなにいい会社で仕事したい』と企業となるのが最初です。光触媒は地道に、あらゆる分野に用途が広がるよう努力していきます。創業100周年にはグローバル企業と呼ばれるよう皆で頑張っています。」

フジコー(北九州市戸畑区)は1952年(昭和27)に製鉄所向け鋳造修理で創業した。オンリーワン事業で市場を切り開き、技術開発を強化して多角化を推進。現在は鉄鋼、環境、介護の3事業を柱に売上高100億円を超え、北九州市で大きな存在感を放つ企業に育った。第一の社訓は「常に夢と計画性を持ち、人生意気に感ずべし」。意気に感じる取り組みで事業化した技術・製品は多く「ものづくり日本大賞」を2度受賞した。また2009年には「日本のイノベーションを支えるものづくり中小企業」に選ばれるなど、九州を代表する技術開発型企業となっている。100年企業に向けて突き進む山本厚生社長に、日刊工業新聞社執行役員西部支社長の長野光博が意気込みを聞いた。

「ただ、私も経験が浅く、そこで誤った判断をしないでほしい」と。最初の人員削減では給与水準が高い経験豊富な社員に手を付けてしまったのです。これが反発を受けました。技能伝承という点から問題だと気づきました。その後、人員削減は会社にとって大切な人は残すようにしたのですが、この時にもう人員削減はしない、ピーク時に新しい事業を始める。この二つを心に決めました。2001年に技術開発センター(北九州市戸畑区)を開発したのもそういう思いがあったからですね。「そうです。リストラ後、新規事業開発に取り組む鋳鉄の肉密接接に端を発する、性質の違う金属同士を接合するCPCプロセスが屋台骨に育ちました。ローラー製造からローラーまで広がるのに数十年前かかっていた。もともとは製鉄所が独自に圧延ロールを製造していたのですが当社が開発した力を入れて参入しました。当初は「中小企業が作ったローラーなど使えないから」と散々悪口を言われて苦労しましたが、外部から技術者を呼ぶなど技術レベルを高め、ようやく大企業と肩を並べるようになりました。その後もうろろのな研究開発を続け、技術開発センターを開発しました。そこで新しい柱の光触媒事業が育ちました。」

挑戦する心意気は 生きていく

CPCプロセス技術が可能なようになります。すでに300μm程度の隙を埋められました。製鋼工程で使われる圧延ロールには駆動する軸部があるのですが、鋼板が通過する重要な部位は全体の約3分の1しかありません。このため生産性の点から早く軸部が邪魔にならないように、軸部はサイクル材などを使えば生産コストを下げられます。ロール価格は一本当たり1000万~1500万円ですが、20%は安くできます。今後、世界の鉄鋼メーカーへ供給を始めます。」

「挑戦しようと思う気持ち強いものほど表現できると信じています。CPCプロセスは当初、ほとんどの人は「無理だ」と笑われたのを、苦勞しながら実現させました。創業が苦勞して築き上げた挑戦する心意気は今も生きています。」

「鉄鋼に続いて、環境と介護を新たな柱に育てています。」

「酸化チタンと抗菌金属を混合した素材を溶射して、基材に被膜する光触媒技術を開発しました。揮発性有機化合物(VOC)の分解や消臭のほか、各種ウイルスの残存率を大幅に低減できます。13年春には9億円を投じて専用工場を建設し「MaSSC(MaSSC)」の名称で空気清浄除菌装置の床や壁など全館に設置も販売しています。今後は工場や農畜産関連の大型施設へも用途を広げるつもりです。これからの20年間、この技術が当社を支えてくれるでしょう。」

「介護分野については収益を上げる目的ではなく、今までの世話になつた創業の地・北九州市への恩返しというか、社会貢献の心で取り組んでいます。当社の光触媒技術を施設の床や壁など全館に利用しており、来館者が臭いがなく空気がきれいだと高い評価をいただいています。」



空気消臭除菌装置(MaSSC)は一般用にも販売